町名の由来と今 第4回

地名の歴史と由来／「清水」の地名

幸田有美子（杉並区立郷土博物館分館）

地名の変遷

荻窪駅の北西部に位置する「清水」は一丁目から三丁目まである、人口4,454人、4,392世帯（平成28年10月現在）の町です。

江戸時代にさかのぼると、現在の「清水」の町域は、豊多摩郡下井草村の小名※1である「沓掛」にあたります。そして昭和7年（1932）の杉並区発足時になると、それまでの「沓掛」は、「沓掛町」と「清水町」に分かれました。町名として「清水」という名が使われるのは、この時からです。

矢嶋又次画「清水の湧水池」
杉並区立郷土博物館蔵
矢嶋又次氏もまた、記憶画の一つとしてこの湧水池を描き残しています。

さらに、昭和40年（1965）の住居表示の実施時になると、「清水町」は、「清水」と町名が変わります（かつての「清水町」は、現在の「清水一丁目」と「清水二丁目」にあたります）。また「沓掛町」は、現在の「清水三丁目」・「今川一丁目」・「桃井一丁目」になります。こうして古くからあった町名である「沓掛」は、この時点で無くなりました。

しかし、現在でも「沓掛」の町名は、町内で目にすることができます。例えば「区立沓掛小学校」（清水三丁目）や「区立くつかけ公園」（清水三丁目）、「沓掛商店会」（清水二丁目・清水三丁目・今川一丁目・桃井一丁目の商店会）等があるからです。その他に、住居表示の実施以前の旧町名である「清水町」、「沓掛町」と「中通町」が一つになった「清沓中通」と呼ばれる地区名もあります。

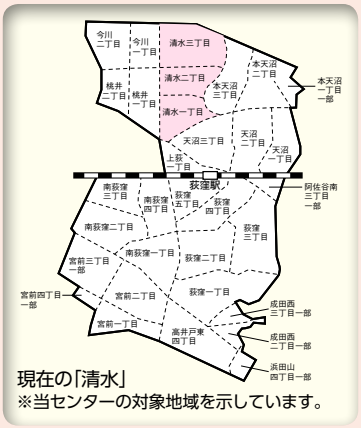
「清水」と呼ばれた場所

現在の「清水」のあたりは、昔から清水が湧く湧水池が多かったため、これが町名の由来であるとされています。町名として「清水」となったのは、前述のとおり昭和7年からですが、それ以前からもすでに、この辺りは「清水」と呼ばれていたといいます。

大正時代、現在の「清水一丁目」24～28番の付近では、清水の湧き出す所が各所にあり、その場所は「清水頭」と呼ばれていました。また、「清水一丁目」のほぼ中心部には、約10㎡の湧水池があり、降雨後には湧水が見られたそうです（『文化財シリーズ37杉並の通称地名』）。

郷土史家である森泰樹氏も、上記の湧水池のある場所について、自身の著作である『杉並風土記』のなかで言及しています。森氏によれば、この湧水池の場所は井口長太氏邸の北側にあたるとして、「清水がこんこんと湧き出ていましたので、江戸時代からこの地は清水と呼ばれ、井口長太家のアダ名を「清水」」と呼んでいたといいます。

現在の「清水」は、住宅が建ち並び、舗装されて、かつて清水が湧き出るような場所であったとはなかなか想像し難い環境となっています。しかし、「荻窪」や「天沼」などの地名と並び、水と縁の深い場所であった当時の景色は、町名のなかに生き続けています。



現在の「清水」
※当センターの対象地域を示しています。

※1：村内を小分けした名のこと。小字ともいう。